2025年度

一般選抜入学試験 問題集

国　語

共栄大学

教育学部／国際経営学部

Ⅰ　次の文章を読み、設問に答えよ。

日本人の会話のなかで、いちばんよく使われるのは「やっぱり」、あるいは「やはり」という言葉ではあるまいか。私はべつに調査をして統計をとったわけではないから断言はできないが、テレビやラジオなどで耳にする会話のなかでも、この言葉は頻出する。ことに何かについての意見を求められた場合にその頻出度は、いっそう高まるようだ。

たとえば、新しい内閣ができて、それについての意見や感想をきかれるようなとき、あるいは世間の耳目を集めるような事件が起こった際、テレビやラジオのマイクを差し出されると、ほとんどの人が「やっぱり、こうじゃないですか」「それはやはり、こうだと思います」と自分の意見や感想の前に、かならず「やはり」「やっぱり」という言葉を、あたかも接頭辞のようにつける。いったい、「やはり」とか「やっぱり」という言葉は何を意味しているのであろうか。

むろん、ほとんどの人はこの言葉を意識して使っているわけではない。無意識のうちに、ただ何となく口にしているにちがいない。かくいう私自身、思わず口に出てしまうことが多い。だから何もそうやかましくせんさくする必要はないと思われるかもしれない。しかし、言葉というものは、それが無意識のうちに使われれば使われるほど、何か秘された重要な意味を持っているものである。それだからこそ、精神分析学ではふと口をついて出る言葉を、精神分析の大切な手がかりにしているのだ。日本の古いことわざにも、「［　ア　］」とある。何気なく口にした言葉であっても、その言葉はその人の心のメッセージであり、正直に本心をつたえているのである。

なぜ私がこの慣用語を気にし始めたのかというと、じつは、知り合いのアメリカ人にその意味をきかれたからなのである。彼は日本語の勉強のために、日本のテレビやラジオをよくきいているのだが、対談とか討論番組になると、出席者がやたらに「やっぱり」を連発することに気がついた。そのように連発される「やっぱり」という日本語の意味はどういうことなのか、というのである。そういわれて、私は返事につまった。はて、「やっぱり」とか「やはり」とはどういう意味なのだろう。慣用語なので私はべつにその意味を深く考えたこともなかった。しかし、それ以来、私もテレビやラジオを注意してきくようになった。すると、とたんに「やっぱり」とか「やはり」という言葉が気になりだした。気になると、いよいよこの言葉が耳につくようになる。しまいにはイライラするようにさえなった。そして、こんなにも日本人が会話のなかでよく使う以上、この言葉には、きわめて日本的な意味がこめられているにちがいない、と思い始めた。

では、その意味とは何なのか。

『古語辞典』（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編＝岩波版）によると、「やはり」というのは、第一に「ゆったりとしているさま。静かにじっとしているさま」だという。やはりのやははヤハヤハとかヤハラなどのヤハとおなじということだが、現在使われている「やはり」はこうした古い意味ではあるまい。第二の意味は「依然として。転じて、予想通り。［　イ　］」ということだが、おそらくこれにちがいない。大槻文彦『大言海』によれば、やはりとは「彌張ノ意ニモアラムカ」というが、それでも意味はよくわからない。ふつう、やはりは「矢張」と書くが、『広辞苑』ではそれを当て字としている。とすれば、こうした当て字からは意味はつかめないわけで、その語源については推測の域を出ない。

しかし、いずれにしても、私たちはこの言葉をさきの第二の意味、すなわち「予想通り」といった意味で使っていることはたしかのようである。アメリカの知人にこの言葉の意味をきかれたとき、私はしばらく考えたすえ、as you know というのがいちばん近いのではないか、とこたえた。そういえば、アメリカ人もふた言目には You know? という間投詞をさしはさむではないか。それとおなじだと教えたのである。

ところが、彼は納得しなかった。アメリカ人のよく使う you know という言葉は、読んで字のごとく「あなたはご存じでしょう」ということであり、自分がしゃべっていることがらを相手が知っているか、もしくは理解しているか、それを確認しつつ話を進めているのであって、日本語の「やはり」とはニュアンスがちがう、というのである。言語の体系が異なる以上、完全な翻訳は不可能だと私はいったのだが、よく考えてみると、やはりと you know とでは、やはりどこかニュアンスがちがう。日本語の「やはり」には、as you know と同時に、as I expected すなわち、私が思っていたとおり、という意味もふくまれているからである。たとえば、「やっぱり雨が降ってきた」というのは、「自分が予想していたように雨が降りだした」ということである。あるいは、「他の人がいっていたように」「天気予報で予告していたように」という意味だ。とすると、これを英語に訳す場合、やっぱりを you know というわけにはいかない。つまり、「やはり」「やっぱり」という日本語は英語の you know ではないということになる。

で、私は彼にそう説明した。すると彼は目をまるくして、こういった。

「ほう、そうなんですか。してみると、日本人はみな［　ウ　］なんですね。何でも初めからわかっているんですから。わかっているから、やっぱりを連発するんでしょう」

たしかに、そういわれても仕方ないふしがある。やっぱり雨が降ってきた、というのは、予想していたとおり雨が降り始めた、ということである。自分が予想したにせよ、他人が予言したにせよ、あらかじめそう考えていたことに変わりはない。やっぱりを頻繁に使う日本人はすべてにわたって予感に似たものを抱いている、ということになろう。

そう。日本人の特質は、つねに何かを予想し、予期しているということなのである。それはある種の運命観といってもいい。日本人はいつもその予感のなかで生きているのだ。

このことは、おそらく日本という風土、その自然環境と無関係ではあるまい。日本では――場所によって多少は異なるが――一年のうちで四季が三か月ずつに均等に配分されており、風月はまことに規則正しく循環している。まさしく、「暑さ寒さも彼岸まで」というあんばいである。このような風土は、世界広しといえども、きわめて例外に属する。他の地域では四季にはたいてい長短があり、雨期と乾期はあっても四季など持たぬ国さえ多いのだ。

四季が均等に分かたれ、歳月がきわめて規則的にめぐる風土では、何もかもがはっきりと見通せる。二月の末ごろに強い風が吹くと、天気相談所に「この風は春一番か」という問い合わせが殺到するそうだが、それは、もうそろそろ「春一番」が吹いてもよさそうだと、多くの人がそれを予期し、予期しているからなのである。そして、気象庁が「本日吹いた風は春一番です」というと、日本人は「やっぱりそうか」とうなずいて安心し、新聞も大きな見出しでそれを報じる。同じことは「梅雨明け宣言」についてもいえよう。梅雨が明けたことをわざわざ宣言するというのは、日本人がみなそれを期待しているからなのだ。だからその期待にこたえなければならないのである。そのような宣言によって日本人は「やっぱり」といって安心する。これが「やっぱり」の［　エ　］背景といってよかろう。

しかし、「やっぱり」にはもうひとつ、［　オ　］な背景がある。それは日本の社会が世界でも珍しいほどの同質社会であることだ。地球上の多くの国々は民族と国民とが必ずしも重なっていない。ソビエトや中国やインドやアメリカ合衆国などの大きな国はもとより、シンガポールのような小さな国でも多くの民族が集まってひとつの国をつくっている。民族が異なるということは、言語や宗教や習慣がちがうことであり、したがってそのような社会では人間関係がきわめて複雑である。

ところが日本の場合は民族と国民とがほぼひとつになっており、この意味でたいへん気楽な社会だといえる。他国に見られるような民族的な軋轢（あつれき）はこの国にはない。日本的な［　カ　］というものが、他の国の人びとから奇異な目をもって見られているようだが、そのような暗黙の［　キ　］が成り立つというのも、この国が同質社会であるゆえだ。

しかし、同質の社会というものは、だからといって、必ずしも手放しで気楽な社会というわけではない。同質社会には同質社会なりの圧力があるのだ。その圧力とは、おなじでなければならぬ、ということである。だからこそ日本はそのローラーによって、他のどんな国よりも――平等を理想とする社会主義国よりも、所得の格差が小さく、国民の大多数がみな「中流」をもって任じているのだ。九〇％以上の人がみなおなじ「中流」階級に属しているなどと思っている国は、ほかにない。

むろん、私はこれに異存があるわけではない。貧富の差がなく、国民の所得が平等に近いということは大いに結構なことである。だが、人それぞれの意見までがおなじ、となると話はべつになる。いくら同質社会といっても、各人の意見までがおなじでなければならぬという道理はないからだ。

ところが、同質社会は、とかく考え方までがおなじでなければならぬように思いこませてしまうのである。日本人が人いちばい世間体を気にするのは、そのような無言の圧力のせいである。世間体を気にするというのは、自分が人並外れていはしないかどうか、という臆病なまでの配慮といっていい。

とうぜん、何かについての自分の意見を発表する際には、そうした配慮が働く。日本という同質社会では、おなじことがいいことなのであり、人並外れた意見というのは白い目で見られるからである。べつに危害を加えられるわけではないが、仲間外れにされてしまうのだ。日本人にとっては、仲間外れほどつらい仕打ちはない。なぜなら、仲間外れになるということは、日本人でなくなるような気にさせられることだからである。「［　ク　］」とか、「梯子（はしご）を外される」という表現は、そうした仕打ちに対する恐怖を正直に語っている。

A

「やっぱり」とか「やはり」というこの慣用語は、じつは、その恐怖を無意識のうちにいいあらわしているのである。日本人が何かについての意見をきかれたときに、やたらに「やっぱり」や「やはり」を連発するのは、「私が思っていたとおり」という［　ケ　］的な、つまり、自信に満ちあふれた立場の表明ではなく、「あなたをはじめ、みんながそう思っているように」「世間一般の人たちが考えているように」自分もそう思う、という意味の「やっぱり」なのだ。だから、マイクを差し出されて意見をただされたときに、ほとんどの人が「やっぱり」をつい連発してしまうのである。それは無意識のうちに世間におうかがいを立て、自分の意見がけっして人並外れた考えではなく、世間のみなさんとおなじように自分もそう考えます、ということを否定する強調詞だといってもいい。

だとすれば、数多くの日本語のなかで、「やっぱり」、あるいは「やはり」という慣用語こそ、何より日本的な性格を正直に告白している言葉といえないであろうか。

私はこの言葉こそ、日本の主語だと思う。「自分はこう思う」というときの主語は、むろん、その意見を発表する「自分」である。だが、「やっぱり」とか「やはり」という間投詞をさしはさむときには、「自分」という主語のほかにもうひとつ、「［　コ　］」という、あるいは「［　サ　］」という大主語が無意識のうちに予想され、前提されているのだ。

（森本哲郎「やっぱり」による）

1　空欄［ア］に入る「日本の古いことわざ」として最も適当なものを、次の1～5のうちより一つ選べ。

1　言葉多きは品少なし
2　言葉は国の手形
3　言葉は第二、態度が第一
4　言葉は心の使い
5　言葉は銀、暗黙は金

2　空欄［イ］に入るものとして最も適当なものを、次の1～5のうちより一つ選べ。

1　予定調和　2　想定外　3　適材適所　4　案の定　5　いい塩梅

3　空欄［ウ］と空欄［ケ］には同じ言葉が入る。次の1～5のうちより最も適当なものを一つ選べ。

1　篤志家　2　偽善者　3　努力家　4　予言者　5　勤勉家

4　5　空欄［エ］と空欄［オ］に入るものとして最も適当なものを、それぞれ次の1～5のうちより一つ選べ。なお、空欄［エ］に入るものは［4］へ、空欄［オ］に入るものは［5］へ解答せよ。二つとも正答の場合のみ得点を与えるものとする。

1　風土的　2　規範的　3　意図的　4　創造的　5　社会的

6　7　空欄［カ］と空欄［キ］には、同じ漢字二文字の熟語が入る。その熟語の一文字目の漢字と二文字目の漢字を、それぞれ次の1～5のうちより一つ選べ（原文では、この漢字に「コンセンサス」というルビがふってある）。なお、熟語の一文字目の漢字は［6］へ、二文字目の漢字は［7］へ解答せよ。二つとも正答の場合のみ得点を与えるものとする。

1　見　2　格　3　意　4　味　5　合

8　空欄［ク］に入るものとして最も適当なものを、次の1～5のうちより一つ選べ。

1　二階からから目薬
2　急いては事をし損じる
3　隣の芝生は青い
4　バスに乗りおくれるな
5　虎穴に入らずんば虎児を得ず

9　10　A段落では、ひとつの熟語が論旨に合わない。その熟語を、次の1～5のうちより一つ選べ。また、それをどのように訂正すればよいか。訂正されたものとして最も適当なものを、次の6～0のうちより一つ選べ。なお、論旨に合わない熟語については［9］へ、その熟語をどのように訂正すればよいかについては［10］へ解答せよ。どちらも正答の場合のみ得点を与えるものとする。

1　慣用　2　恐怖　3　自信　4　否定　5　強調
6　弁明　7　批判　8　挑発　9　感動　0　安心

11　空欄［コ］と空欄［サ］に入るものとして最も適当なものを、それぞれ次の1～5のうちより一つ選べ。解答は［11］に二つともマークせよ（順不同でよい）。

1　あなた　2　アメリカ　3　世界　4　日本　5　世間

Ⅱ　次の文章を読み、設問に答えよ。

〈問題文までのあらすじ〉

十九世紀末のパリ。浮世絵などの日本美術を引っさげて乗り込んできた画商の林忠正。八年後のパリの美術市場は「ジャポニズム」という嵐が吹き荒れるようにまでなってきた。そこで助手として加納重吉を日本から呼び寄せることになった。その頃のパリは、マネやルノワールなどの印象派と呼ばれる画家たちが日本美術から大きな影響を受けて活躍するようになってきていた。弟である画商のテオの誘いでパリにやってきたフィンセント（ゴッホのこと）も、忠正に「日本に連れて行ってくれ」と懇願するまで日本美術に心酔していた。しかし、忠正はフィンセントの願いを断り、「この国であなた自身の日本を見つけ出すべきです」と話して聞かせた。フィンセントは、芸術の理想郷を探すべくアルルに旅立ったが、そこでは精神に変調をきたし、自分の耳をそぎ落とすなどの行動の末、病院生活を送るようになった。しかし、フィンセントはそこにおいて猛烈に絵を描き始め、代表作である『星月夜』を完成させた。

＊問題文中にある「たゆたえども沈まず」という言葉は、セーヌ川の氾濫で何度も洪水や疫病に苦しんできたパリの船乗りたちが、自分の船の舳先（へさき）のプレートに刻んだものである。「セーヌ川の流れに逆らわず、激流に身をゆだね、決して沈まず、やがて立ち上がる」という決意が表れた言葉である。

真っ赤に熟した果実のような夕日が、セーヌ川の上空を茜色（あかねいろ）に染めて、西の果てへと音もなく落

ちていく。

忠正が先に、少し離れて重吉が後に、川辺の道を歩いていく。かつて王妃マリー・アントワネットが収監されていたという牢獄を川向こうに眺めながら、ふたりはセーヌに架かる橋、ポン・ヌフにたどり着いた。

ポン・ヌフ――「新しい橋」という名前は十七世紀初頭に橋の完成とともにつけられてからずっと変わることはなかった――は、セーヌに浮かぶ島、シテの西側の先端を横切って、右岸と左岸をつないでいる。橋の中心に向かって石畳がかすかなカーヴを描き、橋の両側にはガス灯の柱が一定間隔で並んでいる。ちょうど橋脚の真上にふたつの灯柱が立ち、そのあいだには半円形の欄干と同じく半円形の石造りのベンチが一体で造られている。優雅なかたちのベンチは、ほぼ三百年もの昔から、セーヌを眺めるために立ち止まる人の到来をいつも待っていた。

橋のちょうど真ん中あたりで、忠正は、吸い寄せられるように半円形の欄干に近づいていった。重吉も、その後に続いて、船の舳先のような欄干の近くに佇んだ。

心地よい川風が頬をかすめて通り過ぎてゆく。夜九時を過ぎ、ようやく太陽が退場しようとしている。その代わりに黄昏が静かに迫っていた。

橋の上から川上を眺めると、こんもりと緑が生い茂るシテ島の先端の向こうに、アンヴァリッド（パリの古い寺院）の金色の丸屋根が見える。そしてその向こうには、ひと月ほどまえに竣工したばかりの鉄の塔、エッフェル塔が屹立していた。次第に暮れなずむ空の中で、天を突き刺す剣のようなシルエットに変わっていくこの塔を気に入らないパリ市民は少なくなかった。が、ここから眺める鉄の塔は、天に向かって「この指とまれ」と無邪気に差し出された人差し指のように見えた。

重吉は、日本から遠く離れた異国の地、パリに、こうして忠正とふたりでいて、セーヌに架かる橋の真ん中に立っている不思議を思った。

確かに、自分は、日本にいたとき、この街にこうしていることを夢みていた。――ということは、いま、自分は、あの頃の夢の中で生きているのだろうか。

[a]ふと、フィンセントのことを思い出した。

日本へ行きたいとフィンセントは言っていた。夢の国で生きてみたいのだと。

無謀な夢は、かなわなかった。その代わりに、彼はアルルへ行った。そこに自分の理想郷を創ることを夢みて。――その夢もまた、かなわなかったけれど。

それでも、彼は描いたのだ。あんなにも激しく、せつなく、自分自身を画布にぶつけて。アルルから次々に送られてきた彼の絵の切実さ、明瞭さ、まぶしさ。アルルの陽光を吸って命を与えられた絵。そんな絵を描くことが、彼のほんとうの夢だったのではないか。

テオとともにアルルにフィンセントを見舞ったとき、彼はうわ言のようにつぶやいていた。――自分

は「いちばん描きたかったもの」を、まだ描いていないんだと。

とすれば、彼はまだ見果てぬ夢を見ているのだろうか。「いちばん描きたかったもの」を描き上げたとき、そのときこそ、画家としての彼の夢がかなったといえるのだろうか。

「なあ、シゲ。……お前、この街をどう思う？」

忠正の声がした。重吉は、川面に放っていた視線を石の欄干にもたれている忠正に向けた。

「そうですね、僕にとっては……現実のものとは思えない、夢のような街です」

重吉は、心に浮かぶままをすなおに口にした。

「林さんと日本橋の茶屋で話をしたときのこと、いまでもときどき思い出します。おれはパリに行く……と林さんがはっきり言ったあのとき、なんとなく、パリの街なかを流れているセーヌ川が、隅田川に重なって見えたような……」

「なんだそれは」忠正が笑った。

「セーヌ川と隅田川じゃ、まったく違うじゃないか」

「わかってますよ」重吉も苦笑した。

「でも、あのとき……なぜだかわからないけれど、いまの僕たちの姿が、ほんのいっとき、見えていたような……そんな気がします」

それからまた、しばらくのあいだ、ふたりは黙って川面をみつめていた。やがて、忠正が独り言のようにぽつりと言った。

「つれないよなあ。……こっちはさんざん苦しんで、もがいて、あがいているっていうのに……いつだって、知らぬふりをして流れていやがる」

重吉は、顔を上げて忠正を見た。[b]その横顔には薄暮のような微笑が浮かんでいた。

「初めてこの街に来たときは、何をやってもからかわれたし、馬鹿にされたもんだ。『R』の発音がなってないとか、真っ平らで引っかかりのない顔だとか、背が低いから燕尾服なんぞ似合わないだとか、日本は未開の地で野蛮な人間が住んでいるだとか……まあ、散々だった」

馬鹿にされればされるほど、西洋人に引けをとるまいと、歯を食いしばって我慢し、フランス語の勉強を重ね、ルーブルへ行って片っ端から西洋絵画を見まくった。どんどん外に出て、人に会った。自分は日本という国を背負っているのだ、絶対に負けてはならぬ、と心に誓っていた。

それでもくやしさをぬぐい切れないときには、セーヌ川のほとりをひとりで歩いた。どこまでも、いつまでも。歩き続けるうちに朝になってしまったこともあった。くやしいことは、全部、この川に捨ててきた。それらはとるに足りない芥になって、薄緑色の流れに消されていった。

この街をセーヌが流れている。その流れは決して止まることはない。どんなに苦しいことがあっても、もがいても、あがいても……この川に捨てれば、全部、流されていく。そうして、空っぽになっ

た自分は、この川に浮かぶ舟になればいい。――あるとき、そう心に決めた。

たゆたいはしても、決して流されることなく、沈むこともない。……そんな舟に。

「そんな戯言を、アルルに旅立つまえのフィンセントに話したんだ」

重吉は、えっ、と思わず声を漏らした。

「フィンセントに……？」

忠正はうなずいた。

「アルルに行く前日だったかな。お前が留守のあいだに、フィンセントが店に来たんだ。別れのあいさつをしにきたと言って」

短い時間、ふたりは会話を交わした。忠正は、アルルに行ったら自分が描きたいと思う絵を存分に描くようにと助言した。

フィンセントは黙って聞いていたが、突然、告げた。

――c いちばん描きたいものを、私は、永遠に描くことができません。

不思議に思った忠正は、それは何かと尋ねた。フィンセントは、すぐには答えようとしなかったが、やがて打ち明けた。

――セーヌです。

――セーヌ？

すぐにでも描けそうなモティーフだ。実際、印象派の画家たちの多くが画題に選んでいる。なぜ永遠に描けないなどと言うのだろう。

馬鹿ばかしい理由ですが、と前置きして、フィンセントは打ち明けた。

テオを頼ってパリに出てきて、夏を迎えた頃、夕暮れどきにセーヌ河畔をそぞろ歩きした。あふれる光とまぶしさに目を細めていると、まぶたの裏が黄色くなるような気がした。

黄色いセーヌだ、と急に思いつき、次の日、ポン・ヌフの真ん中にイーゼルを立て、黄色と緑の絵の具を大量に準備して、「黄色いセーヌ」を描こうとした。すると、すぐに警官がやって来て、ここで絵を描いてはいけない、と忠告した。その日は仕方なく帰ったが、次の日、あらためて出かけていった。が、同じように警官が来て、同じことを言われた。

次の日も、その次の日も……五日目に、待機していた複数人の警官に阻止されて、今度ここで絵を描こうとしたらコンシェルジュリーに連行する、と言われた。明らかな脅しだった。

フィンセントは、何もしていないのに、セーヌに架かる橋の上でイーゼルを立てることを禁止されてしまった。この不名誉な出来事を、テオに話すことはできなかった。

フィンセントは打ちのめされた。セーヌに、パリに拒絶された、そんな気がした。

その日から、どうやったらパリ以外のところで絵を描いて生きていけるか、そればかりを考えて、

二年間過ごしてきた。日本へ行くことがかなえばそれがいちばんよかったはずだが、それでも「自分だけの日本」をみつけにアルルへ行けることになって、ほっとしている。自分はこれから、セーヌだのパリだのにこだわることなく、アルルで自由に絵を描こうと決めている。――そう言って、フィンセントは話を締めくくった。

「その話を聞きながら、おれは気づいたんだ。フィンセントは、ほんとうはいつまでもパリにとどまりたいと願っている。けれど、この街にどうしたって受け入れられないとわかってしまったから、出ていく決心をした。……だとしたら、さびしすぎるじゃないか」

そんな思いを胸に秘めたまま、アルルへ行ってはいけない――。

忠正は、フィンセントに言った。――セーヌに受け入れられないのなら、セーヌに浮かぶ舟になればいい、と。

嵐になぶられ、高波が荒れ狂っても、やがて風雨が過ぎれば、いつもの通りおだやかで、光まぶしい川面に戻る。

d だから、あなたは舟になって、嵐が過ぎるのを待てばいい。たゆたえども、決して沈まずに。

――そしていつか、この私をはっとさせる一枚を描き上げてください。

そのときを、この街で待っています。

e 忠正の言葉を追いかけながら、重吉は、遠い川面に視線を投げた。

目頭が、どうしようもなく熱くなった。――なぜかはわからない。けれど、涙がこぼれてしまいそうだった。

滔々（とうとう）とセーヌは流れていた。苦しみも、悲しみも、やるせなさも、すべてをとるに足りない芥に変えて、とどまることなく流れていた。

（原田マハ『たゆたえども沈まず』による）

（注）　日本橋＝現在の東京都の地名。
　　隅田川＝現在の東京都を流れる川。
　　燕尾服＝男性の洋装の礼服。
　　ルーブル＝ルーブル美術館のこと。パリにある国立の美術館。
　　モティーフ＝作品の主題。ここでは、描写する対象のこと。
　　印象派＝十九世紀にフランスで起こった芸術家の一派。
　　イーゼル＝画布などを支えて固定する道具。

12

傍線部a「ふと、フィンセントのことを思い出した」とあるが、そのときの「重吉」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちより一つ選べ。

1　夢みていたパリにいることが今一つ実感できない一方で、「フィンセント」は「いちばん描きたいもの」を描き上げれば、夢がかなったといえるのだろうかと思いを巡らせている。

2　理想の地だったパリに立ってはいるものの、「フィンセント」のような「ほんとうの夢」が自分にはまだないということに思い至り、早くみつけなければならないとあせっている。

3　希望通りパリに来られた自分は非常に恵まれていると思う一方で、日本にもアルルにも行くことがかなわず、パリで失意の底に沈んでいる「フィンセント」に思いをはせている。

4　あこがれのパリに立って日本をなつかしく思い出し、「フィンセント」の日本への思いに共感する一方で、それはやはり「無謀な夢」であり故郷がいちばんだと思っている。

13

傍線部b「その横顔には薄暮のような微笑が浮かんでいた」とあるが、そのときの「微笑」を説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちより一つ選べ。

1　異国に受け入れられずひとりもがいてきたことは遠い記憶であり、パリを離れる自分にはもはや無関係だと開き直った微笑。

2　異国で経験してきた苦しみやあせりはすべてセーヌに捨ててきたので、もうパリで悩むことはないだろうという安心に満ちた微笑。

3　異国に受け入れられようともがき続けた結果、日本人でありながらパリで成功したことによって得た自信をみなぎらせた微笑。

4　異国での苦しみやくやしさにやりきれない思いをすることもあるが、これからもパリで生きていこうという覚悟もにじんだ微笑。

14

傍線部c「いちばん描きたいものを、私は、永遠に描くことができません」とあるが、ここでの「フィンセント」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適当なものを、次の1～4のうちより一つ選べ。

1　正答な理由もなくセーヌを描くことを禁じたパリの警察に怒りを抱いており、同じよそ者である「忠正」に共感してほしいと思っているので、強い調子で読む。

2　外国からパリに来た多くの印象派の画家たちが、苦労もなくセーヌを描き次々と世に認められていることに劣等感があるので、自分の力不足を恥じるように読む。

3　パリを離れることは決めているものの、未練もあるというほんとうの気持ちを「忠正」には聞いてもらいたいという思いもあるので、不意に打ち明けるように読む。

4　パリに来たばかりの頃は自分と同じように苦労をしていた「忠正」もいまでは成功者であり、自分の気持ちを理解できないと思っているので、皮肉をこめて読む。

15

傍線部d「だから、あなたは舟になって、嵐が過ぎるのを待てばいい」とあるが、そのときの「忠正」を説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちより一つ選べ。

1　「フィンセント」にほんとうの気持ちを打ち明けられ、かつての自分と同じく、嵐の中であっても力強く浮かび続ける「舟」のように、諦めずパリに残っていてほしいと訴えかけている。

2　「フィンセント」のほんとうの気持ちを察して、自分の体験と重ね、嵐に揺られはしても決して沈まない「舟」のように、アルルに行っても希望を捨てずにいてほしいと願っている。

3　「フィンセント」のほんとうの気持ちを見抜き、かつての自分と重ね合わせながら、嵐の中を勇敢に突き進む「舟」のように、前向きな気持ちでパリを旅立ってほしいと元気づけている。

4　「フィンセント」にほんとうの気持ちを告げられ、自分はくじけてしまったが、嵐が過ぎ去るのをじっと待つ「舟」のように、何があっても諦めずセーヌを描いてほしいと励ましている。

16

傍線部e「忠正の言葉を追いかけながら、重吉は、遠い川面に視線を投げた」とあるが、そのときの「重吉」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちより一つ選べ。

1　「忠正」から、「フィンセント」が警官に受けたひどい仕打ちを聞かされ、よそ者に冷淡なパリで自分もくやしい思いをしたことがよみがえり、涙が出そうになっている。

2　「忠正」から、「フィンセント」の本心を聞かされ、新たな夢を求めてアルルに行ったものと単純に考えていたことが思い出され、自分の未熟さに嫌気がさしている。

3　「忠正」から、「フィンセント」に伝えられた言葉を聞き、自分の知らないところでふたりが夢のために様々な思いを抱えていたことを知り、大きく心を動かされている。

4　「忠正」から、「フィンセント」がほんとうに描きたかったものはセーヌであり、それを諦めざるを得なかった事情を聞き、何もできない自分の無力さに失望している。

17

この文章について述べたものとして最も適当なものを、次の1～4のうちより一つ選べ。

1　画商としての自覚に欠ける「重吉」に対して画家の思いや苦悩を伝えようと「忠正」が懸命に話す場面を、「船の舳先のような欄干」を舞台にして、ふたりの新しい船出を象徴的に描いている。

2　「忠正」や「フィンセント」の心労を知った「重吉」が、あこがれていたパリへ徐々に失望していく過程を、よそ者に冷淡なパリを象徴する「ボン・ヌフ」を背後に感傷的に描いている。

3　日本人が異国の地で生きていくことの苦労を「重吉」に伝えようとする「忠正」の姿を、ふたりの思い出の地である「隅田川」と「セーヌ」とを重ね合わせることで、感動的に描いている。

4　「忠正」と「フィンセント」の苦悩を知り、「重吉」にとってパリの地で生きることに現実味が帯びてくる様子を、すべて受け入れるように流れる「セーヌ」の姿とともに印象的に描いている。

「大問Ⅲ」は著作権の関係でホームページには公開しておりません。

「大問Ⅲ」は著作権の関係で
ホームページには公開しておりません。

Ⅳ　次の文章を読み、設問に答えよ。

三人の男性（ＡＢＣ）と三人の女性（ＤＥＦ）の六人が円卓に座っている。なお、この座り方は、以下の①～⑤の説明の通りである。

①　Ａの右隣はＤである。
②　Ｂの右隣は女性である。
③　ＥはＦともＢとも隣合わない。
④　ＣはＡとは隣合わない。
⑤　女性二人が隣合うところがある。

28　Ａの正面（右から三人目であり左からも三人目である）の人物として最も適当なものを、次の１～５のうちより一つ選べ。

１　Ｂ　　２　Ｃ　　３　Ｄ　　４　Ｅ　　５　Ｆ

【国語】

Ⅰ		
問題	解答	配点
1	④	5
2	④	5
3	④	5
4	①	5
5	⑤	
6	⑤	5
7	③	
8	④	5
9	④	5
10	⑥	
11	④・⑤	5

Ⅱ		
問題	解答	配点
12	①	5
13	④	5
14	③	5
15	②	5
16	③	5
17	④	5

Ⅲ		
問題	解答	配点
著作権の関係で ホームページには 公開しておりません。		

Ⅳ		
問題	解答	配点
28	②	5

共栄大学
学務部 入試課
〒344-0051　埼玉県春日部市内牧 4158
電　話 048-755-2490 （直通）